

えひめ子どもチャレンジ支援機構について

讃岐 幸治

活動報告を聞いて

三つのチームの活動報告を聞いた。参加した子どもたちは、だれもがよい体験学習をした様子が伺えた。悪戦苦闘しながらもやり遂げた喜び、自分もできるのだという自信など、よい学びの機会だったようだし、大いなる感動を得たようである。嬉しいことに、こうした機会があれば、次回も是非とも参加したいとの声が聞かれた。私たちにしても今回のチャレンジ事業を通して学ぶことが多かった。この事業をやってよかったとの思いを強く持ったし、また今後のすすめ方にもある程度の自信を持つことができたように思われる。

これらの活動が、子どもたちに活動の楽しさ、達成感や自信などをもたらしたのは、どうしてか。一つには学校等と違って、特定の指導者がいて子どもたちを指導するというやり方ではなく、子ども相互が互いに助け合い支えあう方向ですすめる活動だったこと。二つには子どもたちが自ら決めたプログラムにそってすすめる活動だったこと。さらに活動の結果もさることながら、そこへ至るプロセス自体の充実度を重視する活動だったこと。

端的に言えば、子どもたち自身が企画立案したプログラムを自らの責任でもって遂行して行った活動だったことが大きな成果をもたらしたものと見える。

チャレンジのために空間、時間、仲間の拡大を

以上のような活動ができるように、つまり子どもたちが主体的に誰に気兼ねすることなくチャレンジしていけるようにするためには、子どもたちが実際に活動していく際の空間、時間、仲間を拡大する必要があった。

今の子どもたちは、家庭内、学級内など狭い空間のなかで過ごしている。そうした狭い空間のなかでは、限られた体験しかできないし、冒険もチャレンジもしようもない。そこで、まずは思い切りチャレンジできるように、活動空間を海に、山にまでも広げ、ひろびろとした空間のなかで自由に活動できるようにした。空間の制限を取り払った。

さらに活動の空間・場所を広げることによって、子どもたちの気持ちの開放を促そうとした。日常的に過ごしている家庭や学校や学級などの限られた空間のなかで、例えば一度「駄目なやつ」というレッテルでも貼られると、その集団のなかでそれをはがすのはなかなか難しいものである。貼られたレッテルをはがし、自分らしさを取り戻せるために、違う空間・場所で過ごすことが大事だ。別の空間であれば、だれもレッテルが貼られていたことを知らないし、素直に自分のありのままを出せ、自分なりに活躍でき、認められることになりやすい。日常とは違った「異場所」を得ることによって、だれもが「居場所」を獲得し、自由に振舞うことができよう。そういった意味からも見知らぬ人と触れ合える場所・空間として日常生活とは違う活動空間を設定することにした。

つぎに、仲間の拡大を図る必要があった。いろいろな人とのかかわりを持たせるために、学校や学年などを超えて、また地域的にもいろいろなところから参加者を募る必要がある。中学生、高校生、それに大学生という異年齢からなるメンバーを集めることにした。調理科の子どもは自分の特技を発揮できたし、図案づくりの得意の子どもはそれなりの活動ができた。それぞれの持ち味をぶつけ合うことができたようだ。

さらに、異年齢からなる集団であったことで、年下の子どもにしてみれば、年上の子どもは「手の届きうる野望を提供してくれる存在」として、目指す目標を提示してくれたし、また年上の子どもにしてみれば年下の子どもの世話をしながら「自らの成長の確認」ができ、また「子どもは必要とされて大人になる」といわれるように、年下の子どもの世話をすることを通して、年上としての自覚や責任感を持つ機会をえた。

最も大事なことは、すべてを子どもたちに任せ、子どもたち自身が企画立案し、自分らの力で推進していくようにしていくために、十分な時間をとったことである。子どもたちが企画実施していくことであるから試行錯誤するであろうし、また初めて出会ったもの同士が連帯意識を高め、協働して取り組んでいくためには寝食を共にする時間もいるだろう。山や海に出かけるということになれば、遠出するに要する時間もいる。そういうことで、長期間にわたって取り組めるように、ゆったりとした時間を設定した。

このように「空間」・「仲間」・「時間」を十分に使えるようにすることによって、子どもたちが自分らで企画しことを、自由に思い通りのやり方で、それぞれのペースでじっくりと時間をかけて取り組んでいった。つまり自分らが満足のいく形で活動できたことで、子どもたちはやり遂げた感動、やればできるという自信、さらには支援してくれた人たちへの感謝の気持ちなどをもちえたといえる。

野球型からサッカー型の運営へ

条件設定のもとで、企画から運営まですべてを子どもたちが主役になって取り組んでいく活動であった。子どもたちの発表会に、ゲストとしてFCの選手の方が参加されていたが、子どもたちの取り組みは野球型でなく、サッカー型の取り組みになっていったといえる。野球では守備の時に活躍するのは主としてバッテリーで、野手は自分の守備範囲から動くことはない。それに対してサッカーはどうか。ボールの位置に応じて、瞬時にすべての選手がそれぞれの判断にもとづいて動きまわっている。すべての選手が常に全力で動き回っているのがサッカーであろう。夕食の片付けなど、だれかが指示したわけでもなく、それぞれが全体を見渡しながら、自分は何をすべきかを判断し、片付けに取り組んでいた。まさに全員参画、参加によるサッカー型の取り組みになっていた。この点もこの事業が生み出した成果の一つともいえる。

なぜ、今「子どもチャレンジ」なのか

ところで、以上で講評は終わっていいが、泊り込んだ大人の間でいろいろと話し合いをするなかで、今後「えひめ子どもチャレンジ支援機構」は、どういう方向に向かえばいいのか、と

いう根本的な問題が提起された。そこで、なぜ「子どもチャレンジなのか」という点について、私なりのたたき台を提起してみたい。

我が国は物的な豊かさを求めて、「より早く、より正確に、より効率よく」をスローガンに突き進んできた。経済社会のみならず、教育社会もこのスローガンのもと同じ路線を歩んできたといえる。その結果として、未曾有の経済成長をとげ、世界第二位の経済大国になったが、それと反比例するように子どもを含めて人びとの「受動化」、「既成化」、「孤立化」が強まってきたといえよう。

つまり「より早く、より正確に、より効率よく」という社会の流れのなかで、未知の世界に向かって冒険や挑戦をすることよりも、間違いなく手っ取り早く仕上げるためには指示されたことを唯々諾々と「受動的に」こなす方がベターだ、自らアイデアを出し創意工夫するよりも「既成化」されたものを模倣する方が間違いもないし、時間もかからない。各人の思いや願いを重視するよりも効率的に正確により早くすすめるには、組織の一歯車として動く方がいい。歯車のように各人はバラバラに「孤立化」し、自らの利害のみを追究する生き方を強めてきたといえる。

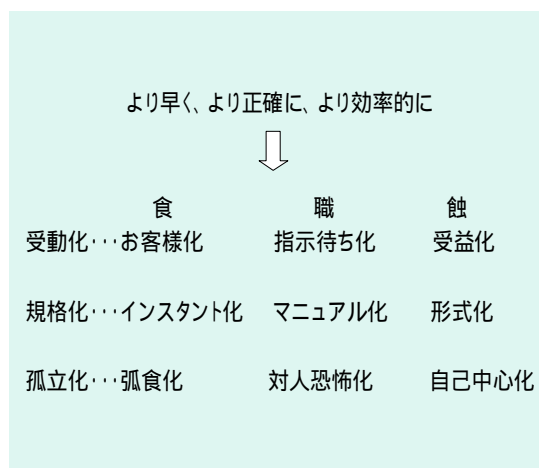
子どもの健全な成長発達のためには、「知育」「体育」「徳育」だけでなく、それらを土台としながら、それに加えて「食育」「職育」「触育」が重要になってきており、われわれとしてはそれらに力を入れていこうとしているところであるが、それというのも食生活、職業生活、社会生活においても図にみるように、受動化、既成化、孤立化がすすんできているからである。

たとえば、**食生活**でみると、大人も子どもも、忙しくなった現在、家族そろって食事をする機会が少なくなった。孤食化がすすんでいる。家庭で料理を作ることはなく、スーパーなどでできあがった既成のものを買って帰ってきて、それを食卓に並べて食べるだけ。「インスタント化」がすすんでいる。

食事をつくるということではなく、家族団欒で食卓を囲むということもなく、各人バラバラで、好きなものを勝手に食べている状態だ。食に対する関心は低く、朝食抜きも普通で、偏食、食べ残しはざら。食に対するありがたさを感じることもない。

職生活のレベルにおいても、受動化、既成化、孤立化がすすんでいる。職場にあっても常に誰かがどうにかしてくれると、指示を待っている人間が増えた。創意工夫することなどなく、ただマニュアルに頼るだけ。携帯電話では話せるが、対面による会話は苦手だ。いや対人関係能力が極端に低下しており、チームワークでもって仕事をする事ができない。

さらに**社会生活**においても、人とのかかわり合えなくなっている。利益ばかりを求め、他者や社会のために何かをするということがない。受益者意識だけが強い。異質な人とのつきあ



いはできず、それを避け、排除し、攻撃したがる。他者について考えなくなり、自己中心的な生き方になっている。

受動化、既成化(模倣化)、孤立化から挑戦化、創造化、協働化の方向へ

食生活、職業生活、社会的接触生活のレベルにおいても受動化、既成化(模倣化)、孤立化が浸透している。人間らしく生きていくということは、未知の世界に向かって限りなく挑戦していくことであり、常に現状に甘んじることなく創造していくことであり、異質のものとも協働していくことである。今日、「人間力の育成」が叫ばれているが、それはまさに挑戦力(Challenge)、創造力(Creativity)、協働力(Collaboration)の総称であり、これら3Cを伸ばしていくことが求められているといえる。

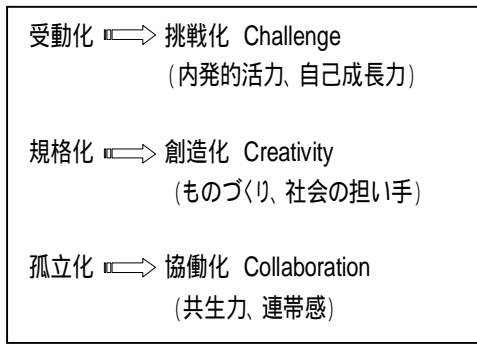
教育とは、与えられた宿命に対する限りなき挑戦であるといつてよく、何よりも自らより高まっていこうとする自己成長力、内発的な活力を育成していくところにこそ、教育の使命があるといつていい。そういう意味で何事に対しても挑戦していく意欲・活力が必要であり、それらの力をつけさせていかなければならない。

さらに規格化されたもの、既成のものを模倣するだけでなく、自ら創造していく力を育てる必要がある。ものづくりであり、社会づくりである。社会の受益者、消費者としてだけでなく、社会の形成者・創造者として育っていくことが必要だろう。社会の担い手として社会力、社会貢献力を身につけるようにしていくこと、また孤立化するのではなく、他者と連携協力し、共に生きる力を育てていくこと、交流とか連携とか、融合とかといわれるが、それぞれの持ち味や価値観を認め合いながら手を携えて共に生き、共に育ちあっていくことこそ大事だといえる。

「えひめ子どもチャレンジ支援機構」は受動化、既成化、孤立化の方向にある子どもたちを挑戦化、創造化、協働化の方向へ向かわせるべく支援していこうとするものである。「子どもチャレンジ支援機構」では、名称としてはチャレンジのみが取り上げられているが、挑戦化を通して創造化、協働化を培っていこうという意味を込めており、これら3Cの育成推進を願った機構であることは認識しておきたいものである。

支援者は「あ・い・う・え・お」の心がけで

では、子どもたちに挑戦力や創造力や協働力をみにつけさせるためにどうしたらいいか。今回の事業で実施したように、支援者である大人の側は「より早く、より正確に、より効率よく」の逆の対応をすることである。つまり、次の図にみるように、「遊び心をもって」子どもの「いいところ探し」をむねとして、減点法でなく加点法で接する。よくやっているところをきちんとみてやる。プラス思考でとらえ、それぞれの多様性を認めてやることである。また「浮き沈みは当然のこととして」あせらずに、長い目でとらえるようにする。高く飛ぶためには低く



かがまなければならぬのと同じように、沈みきっている時は次へのステップのためだといったとらえ方をしたい。そして、常に「笑顔をもって」「お仕着せをせず」に見守っていく姿勢こそが大事だといえる。子どもたちの成長を暖かく見守り、支援者自身が子どもの成長を楽しむことだともいえる。

子どもは「か・き・く・け・こ」にチャレンジを

それに対して、実際に主役として取り組む子どもたちは、逆に厳しい場面に挑んでいくことが期待される。というのは、子どもたちが受動化、既成化(模倣化)、孤立化してきたのは、「より早く、より正確に、より効率よく」ということで、大人の側が取り仕切り、おとなの敷いた路線の上を歩ませてきた。過保護に扱われ、甘やかされ、なにも苦労することなく過ごしてきたからに他ならない。

支援者	子ども
あ・・・遊び心を持って い・・・いいところ探して う・・・浮き沈みは当然として え・・・笑顔をもって お・・・お仕着せせず	か・・・感動・感謝 き・・・危険・緊張 く・・・苦労・工夫 け・・・計画・決断 こ・・・交流・貢献

危険はすべて排除され、なんの危険もないところで、指示されることをすればよかった。感動もなければ、ひもじい思いをしたこともなかった。何事も当然のことと受け取るだけだったために、感謝の気持ちが起こることもなかった。

与えられるだけで、企画し工夫する必要もなかった。異質な人との出会いは自分を傷つけるものとして避け、自分の殻に閉じこもり、自分勝手な生き方をしている

でも、だれからも文句を言われることもなかった。ましてや、社会や他者のために何かをしてやることは自分が損をすることだとして、自分の世界に閉じこもっていてよかった。

したがって、図に示すように、子どもたちが挑戦し、創造し、協働していく意欲やパワーを身に着けていくためには、か - 感動、感謝、き - 危険、緊張、く - 苦労、工夫、け - 計画、決断、こ - 交流、貢献をせざるを得ない、そのような活動場面を設定して、そこへ追い込んでいくことが必要だ。

つまり、今子どもたちが、無感動、無関心なのは、自ら苦労し、工夫することもなく、緊張感のない安易な活動しかしていないからである。さらに、企画立案したこともないし、他者や社会のために汗をかいたこともない。だからこそ、あえて苦労してやり遂げた時の感動体験を味あわせる必要がある。そうした意味で、今必要なのは、「かきくけこ」の体験だといってもいい。子ども自身に企画立案させて、苦労、工夫させることだ。自らが計画してこそ、真剣に取り組むことができるし、自分たちが企画し、決断し、実行してこそ、やり遂げた感動は大きくなり、やれるという自信も生まれてこよう。

チャレンジへの四段階

しかし、受動化、規格化(既成化、模倣化)、孤立化している子どもたちに、以上のような「かきくけこ」体験をすぐにさせるといっても、そう簡単ではない。

受動化、既成化、孤立化している子どもを挑戦化、創造化、協働化の状態に高めていくためには段階を踏まえていく必要がある。

たとえば、「より早く、より正確に、より効率よく」という流れのなかで、子どもたちはびくついている。失敗しないようにとの思いから、親や教師の顔色をうかがい、不安に駆られ、自分を素直にさらけ

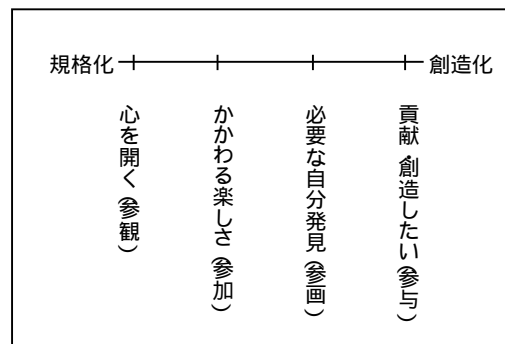
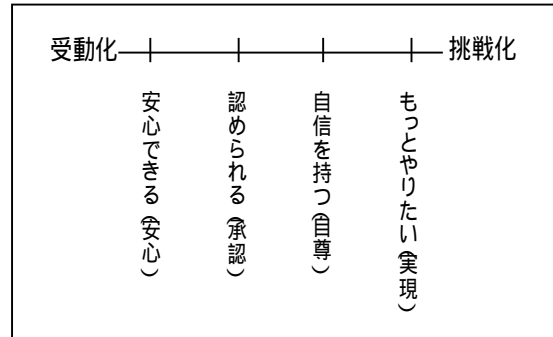
出せない状態にある。引きこもりなどはその典型でもあろう。したがって、まずは「安心できる」状態にもっていくことが肝心。何でもいえる支持的な風土づくりを通して、何を言ってもいい、失敗してもドンマイドンマイと暖かく包み込むことである。

そのなかで「安心して」子どもが活動できるようになると、次はそれぞれのつたない活動であっても「認める」段階がある。みんなに「認められ」てこそ、「自信をもって」振舞えるようになっていく。そうすると、「もっとやってみたい」と思うようになり、自己実現をめざして挑戦していくことになるであろう。受動化している子どもを挑戦していく意欲や資質・能力をもつた子どもに育成していくためには、以上のような段階を踏まえていくことが必要だといえる。そういう意味でも、じっくりと見守り育成していくことである。

また、規格化・既成化したことしかしなない子どもたちを創意工夫し、創造的に取り組んでいく子どもに育てていくためには、やはり同じように段階を踏まえていく必要がある。まずは心を開くようにしたい。与えられたことに慣れ、なにも感動したり感激したりしなくなっていて、心が閉じている状態にあり、みずみずしい感性がなく、干からびた状態にある。したがって、素直に心を開く状態にもっていくことが大事だ。

そして他者や自然などと「かかわる楽しさ」を十分に味あわせる体験をさせる。そのなかで「必要とされる自分」を発見させることだ。自分が必要とされている、いなくてはならない存在だといった自己の存在感を持たせることである。それから貢献する、創造する。あるいは社会の担い手、形成者として育てていくことになる。

また孤立化にしても、端的にいえば自分の殻に閉じこもっている状態の子どもを、まずは他者や社会、自然など触れ合う機会をふんだんに作り、触れ合う楽しさを味あわせることである。そして、それぞれの違いを認め合う体験をさせるようにしたい。違っていてもいいのだ、違うのはあたり前だということを体感させることである。

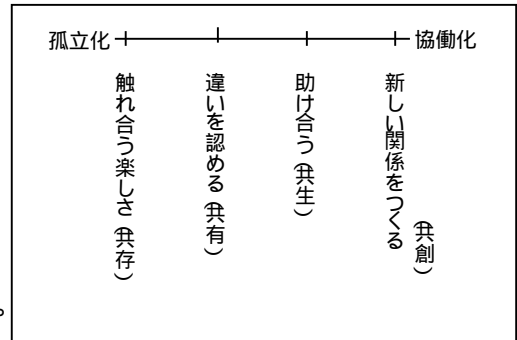


その上で、それぞれの違いを出し合い助け合い支え合うことの素晴らしさを体感させることである。

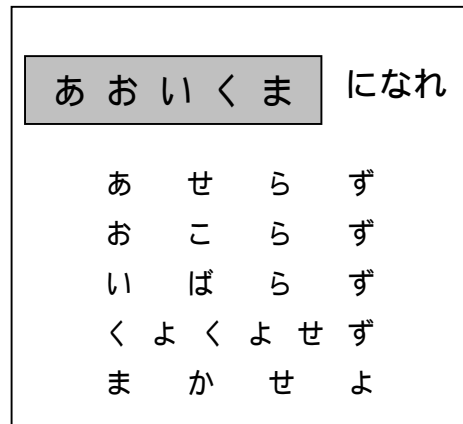
助け合い支えあう体験を通して、新しい関係を創り出していくようにしたい。切磋琢磨の関係といってもいいし、「思いやりのある厳しさ」のなかから新たな関係を創造していくようにするといってもいいだろう。

ゆっくりと時間をかけて、急がないで、少しずつ素直に自分をさらけ出すと、そのことによって自己有能感を高め、安心して自分を出していくことができる。互いに違いがあるが、それぞれの持ち味を認め、支えあいながら新たな関係を創りあげていく。互いに触れ合うなかで、触れ合うことの楽しさを味わい、自分も居場所を確認し、必要な自分を実感しながら、社会の担い手、形成者としてかかわるようになるだろう。

最後に繰り返しになるが、子どもにチャレンジさせようとするあまり、ついつい最初の段階から難しい課題を提起し、それに積極的に取り組むように叱咤激励してしまうと、それではやらされた取り組みでしかなく、指導者などがいなくなると、自ら取り組もうとしなくなりやすい。子どもたちが自主的に自らのエネルギーを傾けて取り組んでいこうとする意欲や情熱、資質・能力を培っていくためには、支援者としては、「あ、お、い、く、ま」の姿勢で子どもたちの活動を支援し、励まし、声援を送っていくことである。



- あ 「焦らず」。
- お 「怒らず」。
- い 「威張らず」。
- く 「くよくよせず」。
- ま 「任せよ」ということである。



下記の設立趣旨のもと、平成 18 年 10 月 12 日、愛媛県指令 18 県推第 258-1 号にて、当 NPO 法人は認証を受けました。

設 立 趣 旨 書

物質的な豊かさ、少子化などの社会経済情勢のなかで、青少年の食生活の乱れ、ニートやフリーターに代表される職業観や勤労観の未熟さ、対人関係能力や公共意識の低下が顕著になってきています。「えひめ子どもチャレンジ支援機構」は、3つの「シヨク」、つまり、青少年の職業観や勤労観の育成の「職」、健全な食生活に向けての意識・態度形成の「食」、さらには対人関係能力の向上やボランティア活動の「触」の推進を図ることを目的と設立したものであります。

この目的を達成するため、私たちは、次のような事業を実施するとともに、愛媛県の青少年が主体的に企画・実施するチャレンジ事業に対して、プログラム開発の支援、指導者派遣、資金援助を行います。

- 1) 職場体験の場の開発とその情報提供、職場体験学習プログラムの開発
- 2) 職業人による青少年向けの講演会・学習会の開催
- 3) 食生活への認識・態度を培うための、野外炊飯、郷土料理づくり体験活動、青少年による料理づくりコンテストの実施
- 4) 食材への関心を高めるための農業体験、漁業体験、山村(菜)体験活動の実施
- 5) 通学合宿の実施、青少年によるまちづくり活動への支援活動
- 6) 青少年ボランティアによる体験交流集会の実施
- 7) その他青少年健全育成に関する事業

これらは特定の利益に寄与するものでなく、愛媛県の不特定かつ多数の青少年の健全育成に資するための事業であり、青少年の健全育成に取り組む各種の団体、個人の活動を支援する公共的な活動です。

これらの事業を今後拡充しながら実施していくためには、現会員の会費のみでは限界があり、広く企業や個人等の皆様の外部資金に頼らざるをえません。企業や個人からの寄付金によって運営をはかる本機構は、その事業資金の獲得及び資金運用の透明性をはかる必要があるとともに、責任を明確にし、活動を継続していくために、ここに特定非営利活動の法人格を取得することといたしました。

えひめ子どもチャレンジ支援機構役員名簿

理事長	村上 伸二	理事	堺 雅子	理事	中 政勝
副理事長	井門 照雄	理事	讃岐 幸治	理事	中西 省三
副理事長	宇都宮正男	理事	柴崎 あい	理事	藤村 邦子
理事	小笠原貴久	理事	関 福生	理事	藤原 浩子
理事	門田 晃良	理事	仙波 英徳	理事	村上 親男
理事	亀井 文雄	理事	竹場 忠芳	理事	山下 道子
理事	國分美由紀	理事	田鍋 修	監事	村上 亮二

18年度の反省と評価

1 会員募集について

立ち上げから短い期間であったが100名を超える会員が集まった。個人的ネットワークを生かし、志を結集したといえる。来年度はさらなる会員募集を図りたい。

また、個人会員のみでなく法人会員の獲得にもチャレンジしたい。

2 立ち上げイベント「みんなでチャレンジみんなのチャレンジ」について

- ◆ 3ヶ月の間に、子どもたちは自主的に動くようになり、また大人にとっても気づきの場となるなど、それぞれに成長が見えた。しかし、折角の成長も、きちんとした後付が出来なかったのは残念である。
- ◆ 活動を進めるに当たっては、大人と子どもの関わりかたが難しかった。特に大学生の位置づけに配慮が要りそうだった。また、大人が口を出してしまう傾向が強い。子どもに任せることの意義を再考する必要がある。
- ◆ 中・高・大の異年齢の組み合わせは当NPOならではのものだろう。今後も続けていきたい。事業決定から実施まで1ヶ月の準備期間しかなく、時間的にタイトだった。
- ◆ 理事が実行委員会も兼ねる方式で実施した事で、一般会員の参加意欲を削ぐ結果を招いたのではない。幅広い参加者募集も含め、次年度の大きな課題である。

平成18年度反省評価・新年度事業打ち合わせ会を開催。当日は国立教育政策研究所社会教育研究センター馬場祐次朗センター長、日本ボランティア学習協会常任理事木村清一先生もアドバイザーとして参加。



2007年2月27日
松山市社会福祉センター5階会議室

19年度の目標と課題

1 会員の拡大について

- ◆ 18年度の活動報告書をしてこに再度会員の拡大を図る。
- ◆ 企業・団体等の参加を促す。

2 組織の拡充について

19年度中に八幡浜を中心に新しい活動拠点を作る。東予についても検討を始める。

3 組織体制の充実について

組織拡大に伴い、その機能の充実と効率性を高めるために、事業部体制を検討する。

- 1 運営部
- 2 会員増強部(資金獲得)
- 3 事業推進部(プログラム開発の支援・指導者派遣・資金援助)
- 4 広報宣伝部
- 5 他機関交流推進部(委嘱・委託事業)

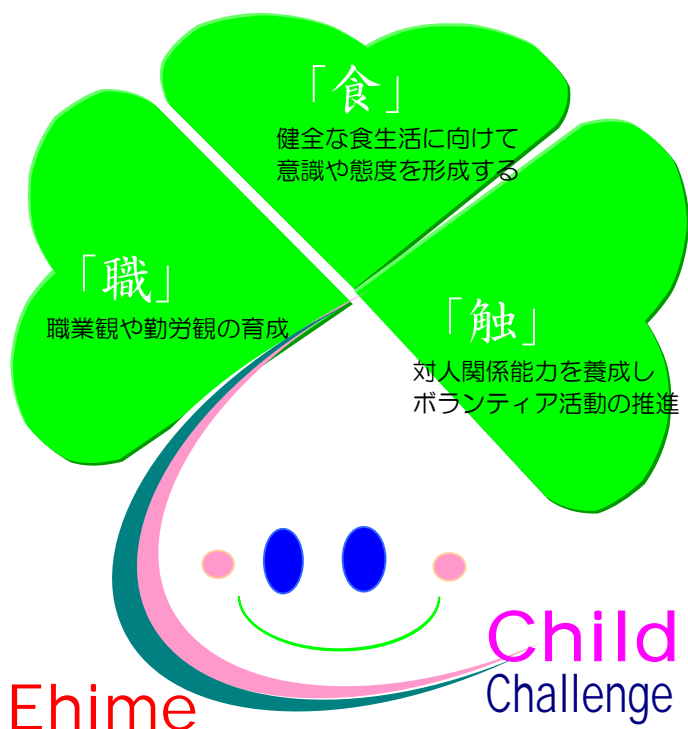
等を設置し、各部に責任者を配置。組織体制の充実を図る。

4 オリジナル事業「みんなでチャレンジみんなのチャレンジ」の継続実施

5 新規の委嘱・委託事業を実施

明日へはばたく子どもたちのチャレンジ を応援する！

特定非営利法人 えひめ子どもチャレンジ支援機構



合言葉は

わたしたちは、愛媛県の青少年が、自ら企画したり、実践したり…

そんな活動を支援します。

(体験交流事業の実施、プログラム開発の支援、指導者派遣、資金援助など)

会員を募集しています！

会員

当機構の目的に賛同していただくみなさまです。

年会費

正会員	個人及び団体	—□ 1000円 (何口でも)
賛助会員	この活動を援助する企業及び団体	—□ 5000円 (//)

会員のみなさまに

活動の報告・講演会・研修会等へのご案内を差し上げます。

加入方法

下記の口座に振り込んでいただくか本会へご持参ください。

振込先 伊予銀行 福音寺支店 普通 1315511
NPO 法人 えひめ子どもチャレンジ支援機構 理事長 村上伸二

問合せ/所在地 松山市上野町甲650番地 愛媛県生涯学習センター内 FAX 089-960-1900
URL <http://island.geocities.jp/kodomochallenge/> E-Mail kouma@d6.dion.ne.jp

